

<研究ノート>

外国語教育における法言語学資料の活用

——EGP 及び言語学教育への応用例——

兼 元 美 友

キーワード：法言語学 動詞意味論 EGP 目撃証言 商標

裁判員制度の導入に伴い、我が国では、法と言語の関連性について関心が高まっている。法言語学 (Forensic Linguistics) とは、欧米を中心に、ここ 20 年ほどで発展してきた新しい学問領域であり、文字通り、法と言語の関係性の解明を目指すものである。その研究対象は、恐喝、強要、偽証など言語使用により犯される犯罪 (language crimes と呼ばれる)、名誉毀損、特許、商標など言語が直接関連する諸問題、書き手や話し手を特定するための異同鑑定 (剽窃に関連)、目撃証言の信用性など、多岐にわたる。法言語学では、実生活での言語使用に基づくデータを詳細に検討することから、これらの文献は、外国語学習者 (英語の文献が多いことから、特に英語学習者) の語学力の向上に役立つ。また、法言語学の分析に、理論言語学の手法が用いられることから、言語学を専攻する学生または英語学に興味を持つ学生が、緻密な分析力を身につける一助となるとも考えられる。そこで、本稿では、法言語学に関する資料・文献を用いた言語教育の一例を紹介する。

1. 授業の概要

1.1 対象と目的

受講生は、英語学専攻の学生、英語教員を目指す他言語専攻の学生などであった。開講当初に挙げた授業の目的は、1. 法言語学という学問領域の紹介、2. 言語学的センスの向上、3. EGP への活用の3つである。

1.2 内容

授業の構成は、(1) 初歩的な法律概念の理解と基本的な法律用語の習得を目指す練習問題と、(2) 法言語学研究に関する資料文献の紹介、という二本柱を設けた上で、基本的には両者を交互に進めていく形を採った。(2) については、レジスター、異同鑑定、書き言葉と話し言葉の対比、目撃証言の信用性、法廷における語彙選択、商標

分析を取り上げて紹介した。

2. 事例：「目撃証言の信頼性」分析における動詞の役割

2.1 Loftus and Palmer (1974)

Loftus and Palmer (1974)¹は、目撃証言の信頼性に関する論文であるが、以下に述べる二つの実験とその結果が報告されている。

第一の実験は、実験参加者たちが自動車事故の映像を見た後で、(1a)の質問に答えるものである。(1a)の下線部の動詞を(1b)に列挙された動詞に入れ替えて質問した際に、実験参加者達の答える速度に変化が出るかを調べる。結果は(2)の通りである。

- (1) a. About how fast were the cars going when they smashed into each other?
b. { collided with / bumped into / hit / contacted }

(2) TABLE 1: SPEED ESTIMATES FOR THE VERBS USED IN EXPERIMENT 1

| Verb | Mean speed estimate |
|-----------|---------------------|
| Smashed | 40.5 |
| Collided | 39.3 |
| Bumped | 38.1 |
| Hit | 34.0 |
| Contacted | 31.8 |

一週間後に行われた第二の実験では、“Did you see any broken glass?”という質問に対して実験参加者達に答えを求める。実際には窓ガラスは割れていなかったにもかかわらず、(1)において *smashed* という動詞で質問された参加者達が、より強く *yes* と答える傾向にあることが観察されている。結果の詳細は(3)に示した。

(3) TABLE 2: DISTRIBUTION OF “YES” AND “NO” RESPONSES TO THE QUESTION

| Response | Verb condition | | |
|----------|----------------|-----|---------|
| | Smashed | Hit | Control |
| Yes | 16 | 7 | 6 |
| No | 34 | 43 | 44 |

このような結果から、Loftus and Palmer は、目撃した出来事の後になされる質問が、目撃した出来事の記憶を再構築する可能性について指摘している。特にこの場面では、

質問文に出現する動詞の選択によっては、実際に目撃した際の記憶を塗り替えてしまう可能性がある点が問題となる。

2.2 課題：動詞の相違を分析する

そこで、同じ映像を見たはずの実験参加者達が、(2)のような異なる答えを出した理由について、受講生達に考えてもらうという課題を出した。

2.2.1 語彙意味論の考え方をを用いて

語彙意味論の分析手法に基づいて、実験 1 で用いられた動詞を検討してみる。²まず、働きかけ（接触・打撃）と状態変化を表す動詞の区別が関連するため、受講生に語彙意味論における動詞の分類の概要を説明した。典型的な接触・打撃動詞と状態変化動詞では、語彙概念構造に(4)のような違いがあることが知られている。

- (4) a. 接触・打撃動詞 (*touch, hit, kiss, slap, kick, seize, push, wipe, rub* など)
[x ACT ON-y]
- b. 状態変化動詞 (*break, cut, shatter* など)
[x ACT ON-y] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]

表記については、研究者間で多少の違いが見られるが、(4a)の目的語(y)は、接触・打撃の及ぶ作用対象にとどまり、(4b)の目的語(y)のように状態変化を被るわけではない。これら二種類の目的語を区別する必要性から、状態変化の対象は上位事象のみならず下位事象にも関与する項、状態述語(BE)の主語として規定されることとなる。(影山 1996) 実験 1 の動詞に話を戻し、(5)のような表現を観察してみよう。

- (5) a. Cars smashed to pieces (新聞の見出し)
- b. a bump 「(ぶつかってできた)こぶ」

(5a)に見られるとおり、典型的な状態変化動詞に分類されている *break, shatter* と同様に、*smash* も *to pieces* 「粉々に」といった結果述語を伴うことがある。これは、動詞自体がその意味内容として状態変化を含んでおり、その変化結果の様子が *to pieces* により具現化されていることを意味する。また、(5b)の *bump* が名詞として用いられた場合、「(衝突の結果できた)こぶ」を表すとされる。Levin (1993)によれば、ゼロ接辞で名詞化された場合、*hit, touch* などの接触・打撃動詞の名詞形が「行為そのもの」を表す一方、状態変化動詞の名詞形は「行為の結果」を表すという。このことから、*bump* も状態変化を含むと考えられる。以上より、*smash, collide, bump* については同じ状態変化動詞に分類される可能性が高い。(2)の結果において、実験参加者の返答した平均速度が大きく変化するのが、*Bumped* と *Hit* の間であるから、この違いは、動詞自体が状態変化の意味まで含むか否かに関係していると言えるかもしれない。現実世界において、二台の車が接触し、全く何の変化も生じないことは考えにくいかもしれないが、

あくまで言語レベルでの母語話者の認識には、動詞の表す意味内容の違いが速度の認識に影響しているようだ。つまり、衝突の結果車に損傷が生じることが予期できる状況であるから、何らかの状態変化を含意した動詞が用いられた場合、そうではない場合より、速い速度で走っていたと認識されるのは自然なことだと考えられる。

続いて、hit と contact を検討する。hit が状態変化を伴わない接触・打撃動詞に分類されることは先に述べたが、hit の表す接触にはある程度の衝撃が含まれる。一方、contact は、日常的にはもっぱら「(相手)と連絡を取る」の意で用いられる。コーパスでも接触の用法はほとんど見つけられないが、あえてその意味で用いられた場合、その接触の弱さから touch とほぼ同義と考えて支障ないものと思われる。英語は、日本語やその他の言語に比して、事象の合成により結果構文を比較的自由に生成できる言語である。しかしながら、「結果構文における行為と結果は全体として有機的な1つのまとまりをなしていなければならない。そのため、行為（働きかけ）はどのようなものでもよいわけではなく、結果状態を直接的に導くようなものである必要がある。」(影山 1996: 256) Levin (1993)は、hit と touch をそれぞれ Verbs of Contact by Impact、Verbs of Contact: Touch Verbs と名付けて区別し、結果構文における以下の違いについても言及している。

- (6) a. Paula hit/kicked the door open.
- b. *Carrie touched the door open.

同じ接触・打撃動詞で、平均速度に差異が出るのはこの相違に原因があると考えられよう。

2.2.2 コーパスやシソーラスの活用

2.2.1 節より、smash, collide, bump の3つについては、語彙概念構造上違いはなく、同じ動詞クラスに属するということがわかった。これら3つの動詞の違いは、統語的なレベルではなく、各動詞が独自に表す(idiosyncratic な)動作の様態の違いに求められる。そこで、これらの違いを明らかにすべく、受講生達にはコーパスを用いてこれらの動詞と共起する語句を観察し、シソーラスの助けも借りつつ各動詞の意味の違いを検討してもらう課題を出した。その結果、次のような回答が集まった。

- (7) a. Smashed: 窓や家具を壊すイメージ、完全に破壊する
- b. Collided: 主語は、惑星、列車、トラック、ボートなどが多い
(→強い衝撃が予想される。一方的な攻撃ではない。)
- c. Bumped: 飛行機の衝突の例が多い。損傷の意味が含意される。
- d. Hit: 強い衝撃を伴う例
- e. Contacted: ほとんどが「連絡を取る」の意

(7a)の Smashed に含意される完全な破壊の意味を考慮すると、第二の実験に関して(3)

のような結果が出るのも納得がいく。

この事例では、受講生たちは、語彙意味論の動詞分析の手法を活用しながら、コーパス等で当該動詞を含む多くの事例を綿密に調査し、(2)と(3)の結果に見られる傾向の原因を探ることができた。

本事例を、1.1 節で提示した授業の目的に照らして考えて見ると次のようになる。まず、研究論文を扱うことで、受講生に法言語学という学問領域の紹介をした。[(1)の目的] 語彙意味論の手法を一助に動詞を分析することは、言語学的センスを磨くことになる。[(2)の目的] 具体的に各動詞の用法の違いを認識し、正しく使用できるようになること、また英語論文の読解や単語・表現力の増強を目指した課題は、一般的な英語力の向上にもつながると考えられる。[(3)の目的]。

3. まとめ

本論では、法言語学資料の外国語教育への活用例として、「目撃証言の分析における動詞の役割」に着目した事例を紹介した。それにより、一般的な英語力の向上と言語学的分析力の涵養のために、法言語学の資料が有用であることを示した。今後も、日本ではまだ始まったばかりの法言語学理論の構築を目指しつつ、同時に最新の研究を外国語教育に活用する試みを続けていきたいと考えている。

注

¹ 堀田(2010)でも、EGP 利用(冠詞の区別)についての提案がなされている。

² 第一の実験で用いられた動詞のうち、smash, collide, bump はいずれも自動詞として用いられ、「二台の車が衝突した」という意図性を含まない事象を表している。しかし、いずれの動詞も自他交替が可能であることから、純粋な他動詞 hit, contact との共通性を認めることができる。

参考文献

- 橋内 武・堀田秀吾 編著 (2012)『法と言語 法言語学へのいざない』くろしお出版。
堀田秀吾 (2010)『法コンテキストの言語理論』ひつじ書房。
影山 太郎 (1996)『動詞意味論 言語と認知の接点』くろしお出版。
Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. University of Chicago Press.
Loftus, E & Palmer, J. (1974) "Reconstruction of Automobile Destruction: An Example of the Interaction Between Language and Memory," *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 13: 585-589.
中村 幸子 (2006)「法廷ディスコース分析—コーパス言語学からのアプローチ—」『通訳研究 第6号』: 197-206.

(信州大学 全学教育機構 准教授)

2015年1月12日受理 2015年1月28日採録決定